



第二次大戦下の西田幾多郎



一書簡と日記で読む
老哲学者の足跡一

小林 道憲

第二次大戦下の西田幾多郎

—書簡と日記で読む老哲学者の足跡—

小林 道憲

1 戦争の勃発と老哲学者―昭和十六年

今年、第二次大戦が終結して七十年になる。

この第二次大戦にわが国が突入していったのは、昭和十六年（一九四一年）十二月八日、日本海軍による真珠湾攻撃を発端として、日米戦が勃発したことからであった。だが、それに至るまでは、日米双方とも懸念な外交交渉が行なわれていた。日米交渉が始まったのは、日本の南部仏印（フランス領インドシナ）への進駐が原因であったが、それを切っ掛けとして、アメリカは在米日本資産を凍結、さらに石油の対日全面禁輸を決定した。

しかし、わが国では、外交交渉が行き詰まる中、九月六日の御前会議では、十月下旬を目途に対米英戦の準備を完了することが決められた。この間、十月十六日近衛内閣が総辞職、陸軍大将・東條英機を首相とする内閣が成立した。この時、昭和天皇は、九月六日の御前会議の決定を白紙に戻すように注文、戦争回避への努力はなおなされていた。そのため、東條内閣は、発足直後から国策の再検討を行なった。しかし、結局、十一月五日の御前会議で、十一月末まで日米交渉を行ない、不成立の場合、十二月初旬に開戦すると決定された。そして、日米交渉は決裂、日本は遂に戦争に突入したのである。

西田に集まる国粹主義者の攻撃

この日本が陥った危機に対して、当時、日本の代表的な哲学者、西田幾多郎はどのような態度をとり、何を憂い、何を考えていたのであるか。西田はすでに七十歳を越していた。

昭和十六年一月、西田は御講書始で天皇にご進講するように申し付けられたが、実際には、引き受けたものの乗り気ではなかった。国粹主義者からの批判を恐れたからである。六月一日付和辻哲郎宛書簡では、その頃書いていた「国家理由の問題」という論文に言及して、次のように書き記している。

……先日こちらにお出になりました節お話ししましたものを今書いて居るのですがその節若しかしたら「講座」へと云ふ様なお話が御座いましたと存じます。題は

「国家存在理由の問題」

即ち Staatsr. Reason 「国家理由」の問題といふので、つまり私の立場から見ると国家といふ

ものはいかなるものかといふことを考へて見たのです。……

京大から東大に転じた和辻は、その頃、東大で倫理学を講じ、同時に、岩波の「倫理学講座」の編集にも携わっていた。

九月十三日付務台理作宛書簡でも、

その後いかが。今度の「国家理由の問題」をおすきの時に御一読下さい。自由主義とか個人主義とか云はれる理由はなからうと思ふが。

と述べている。務台はこの頃、東京文理大で哲学を担当、西田の弟子の中でも、西田の影響を強く受けた一人であった。

西田は、これからの国家観は民族中心主義や帝国主義ではためて、尚一步を出なければならぬと考へていた。日本中心の民族主義や帝国主義ではなく、世界の形成に寄与する日本という大きな視野で、国家をとらえようとしていたのである。世界は、個人の創造を通して国家を形成し、国家の創造を通して自己自身を創造していく。個人や国家は、そういう世界の自己形成に貢献しなければならないというのが西田の考へであった。

当時は、その世界的立場ゆえに、西田の思想に対する国粹主義者からの攻撃が厳しかった。「国家理由の問題」と同趣旨の問題を論じた御講書始での講義草案「歴史哲学ニツイテ」の原稿が公刊されることに対しても、西田の学習院高等学科教授時代の弟子、木戸幸一（昭和天皇の側近・内大臣）に宛てた書簡（二月十三日付）では、西田は「印刷されることすら好まない」と述べている。

現に、西田の思想は、昭和十三年頃から、雑誌「原理日本」を拠点とする養田胸喜むねきら国粹主義者から盛んに攻撃されており、西田はそれを一倍感ずるとともに、西田と同じ思想を持つ親友や弟子達のことにも心配していた。《学術雑新》を旨指す養田らの攻撃は、相手を失脚に追い込む力をもっていたからである。自由主義的刑法学説で失脚した滝川幸辰あきしん、天皇機関説で失脚した美濃部達吉、「国家の理想」（「中央公論」昭和十二年九月号）を書いたために失脚した矢内原忠雄、反軍思想で失脚した河合栄次郎など、みな、養田らの攻撃による。現実の政治勢力とつながっていたのである。

だが、五月二十九日付原田熊雄宛書簡では、西田の考へが分かりやすく述べられている。

……今日の世界の世の大勢といふのは個人的自由主義の文化がゆきつまつて一大転機に臨んで居る事はいつれの方面もさう考へられるが、さりとてそれは旧にかへるといふ事にあらず。ここに新たな世界が生れねばならぬといふことと思ひます。そしてこの新しい世界といふのは全然自由主義を否定したものではなからうかと思ひます。……日本人が自覚するといふことはよいが唯反動的に旧に還るのでは進歩を阻害するに過ぎないと思ひます。今日反動論者のいふ所は何も新しい出立点がないと思ひます。今日世界の一員としての日本は大に日本文化を世界的に発展せねばならぬと思ひます。それは日本文化を合理化することである。……

原田熊雄は、近衛文麿や木戸幸一らとともに西田の学習院時代の弟子で、当時は、近衛や木戸の近くにおいて、晩年の西田に政界や軍部にかかわる情報を提供し、また西田の意見を近衛らに伝えていた。

西田は、あくまでも、世界の一員としての日本という立場から日本文化を発展させることが大切だと言ひ、武力によって領土を拡大し、日本の力を世界に知らしめようとする当時の軍の考えには否定的であつた。

しかし、窮地に追い込まれつあつた日本の世論は、国粹主義者や陸軍の主張する方向に迎合的で、文部省も、そのような世論になびきつあつた。昭和十五年末以来文部省の参与を引き受けていた西田は、ややもすれば勢力の大きい方へ追従していく文部省の姿勢を強く批判している。また、戦争という目先のことに追隨し、学生の学業を短縮するという計画を立てていた文部省にも、西田は大きな疑問をもつていた。さらに、大きな標語を声高に叫び、国民を煽っているラジオや新聞も批判している。九月十六日付山本良吉宛書簡でも、次のように述べている。

……今年は高等学校大学などもこの十二月にて卒業の由。大学なども二年にする計画とか。国家の現実は何処までになつて居るのか分らないが、教育之制度はさう現実に追隨してよろしきものなるや否や。今日の世界状況などどう結着することやら今の処殆んど見当がつかぬとおもひます。唯目前の状態に追隨してもどう変するかも知らず。教育のことだけはもつともつとよく考へてやつてもらひたいものと思ひます。

抽象的な標語の大言壮語、希望と可能との簡単な混同、かふうう風に（軽薄な非着実的に）のみ人心が動いて行つては将来どうなるものによ。

K〔近衛首相のこと〕も今度は真剣に努力し居る由なれども果してどうか。心細き次第なり。

山本良吉は教育者で、当時、武蔵高等学校校長、西田とは第四高等学校時代の同級で、生涯にわたって親しく交わっていた。昭和十五年三月には、二人の対談をレコードに吹き込んだことがある。「創造」と名付けられたこの対談では、時々机を叩く音が聞こえるほどの西田の熱弁が奮われており、個人の創造性を抑圧する全体主義に対する批判が繰り返しなされている。

時局に対する西田の見識

西田は、書簡から察する限り、少なくとも昭和十六年八月頃には、国家が極めて重大な時期にさしかかっていることを認識していた。京大時代の教え子でもあった当時の首相、近衛文麿にも、今までの行きがかりに因わずに重大な決意をすることを、西田は期待していた。このことは、原田熊雄に宛てた十月二日付書簡からも知ることが出来る。

……K君にはまだ逢ひませぬが今度こそは行懸等に捉ら〔わ〕れず大局を遠視して身命を投打つて決断すべき時とおもひます。いかがでせう。さういふ方向へ向いて居るや否や。何処までも我国現実の立場から決断せなければならぬとおもひます。誤れるものを誤とし正しきもの〔を〕正し〔と〕するに勇ならざるべからず。……

この書簡からも窺えるように、中国侵攻を始めたのが近衛だということを考えれば、おそらく西田は、中国本土からの撤退の決断を近衛に期待していたと思われる。十月に、海軍出身の野村吉三郎が駐米大使として就任した時も、西田は野村の手で対米交渉が調整されるよう期待していた。西田は、中国進出にも日米開戦にも反対であった。ところが、そのような中、ゾルゲ事件が発覚、さらに、開戦を主張する陸相・東條との折り合いもつかず、近衛が切望した日米首脳会談もできず、十月十六日、第三次近衛内閣は総辞職した。この近衛の姿勢に対して、西田は、前日の十月十五日付山本良吉宛書簡で、次のように批判している。

……K窮して投げ出すとの事誠に困つたものと存じます。これまでにさんさん軽率に

大事をあやまり動きがとれないのではなからうか。この上更に無謀の暴挙に進めば前途
寒心の至りに存じます。……

西田は、近衛が日華事変の拡大、三国同盟、仏印進駐と、次々と戦況を拡大していった
ことが軽率だと感じていたのである。その上、日本が日米開戦にまで突き進んでは、大変
なことになると憂慮していたのであろう。

四高時代の同僚の堀維孝（国文学・漢文学）には、戦争に対する嫌悪感や息子・外彦の
心配、そして民族中心を唱えながら戦況を拡大しているナチス・ドイツに対する批判を伝
えている。八月二十八日付堀維孝宛書簡。

……全く尊兄と同感にて実にイヤな世の中と相成り何のために生きてゐるか分らぬと
云ふ外ありません。もう仕事する気にもなれません。

……私の方にも外彦が四年間召集せられてみて昨年の暮漸く帰り来り一安心致しまし
た処又七月のはじめ召集せられ今度は戦闘隊にてソ満の方へ行つて居るらしいです。今
度は愈々戦争ともなればいかがり行くこととおもひ居ります。ドイツもロシヤの抵抗
中々容易ならず。思ふた様にはゆかぬのではないかと思ひ居ります。……

西田は、ナチスを文化破壊者と見ていたから、ナチス・ドイツと手を結んだ日独同盟に
も反対であった。

家族への思いと身体の不自由

西田の次男・外彦は昭和十五年十一月初めに除隊、その後、神戸製鋼所に入ったが、昭
和十六年七月には再び召集されることになった。西田の長男・謙は、大正九年、西田が五
十歳の時、腹膜炎で急死しており（享年二十二歳）、西田にとっては、次男の外彦だけが頼
りであった。外彦の妻である麻子宛の手紙でも、家族に対する西田の思いが込められてい
る。七月十九日付西田麻子宛書簡。

外彦はよく落ち着いてみてこちらから元気に出立致しました。三人にて停車場まで送
りました。入隊後まだ通信なども禁ぜられて居るのではないかと存じ居ります。今日の
様な状態にてはどういふ風になつて行くか殆んど見当もつかぬとおもひます。私も昨秋

帰って来てくれて全く安心いたしましたのですが又今日の如きことにて、この世の中のこと明日どういふ事が起るか分らない。これが人生といふものだと言ふことを今更ながら深く感じました。……かふいう時が進むか退くか人生の分岐点とおもひます。かふいう時こそ女ながらも高邁な精神を奮ひ起して一向に二子の教育に努力してもらひたい。外彦も深く之を念として頼んで行きました。私ももう老年ながらできるだけの事は致したいと思ひます。……

だが、この頃から西田はリューマチに悩んでおり、入院、やがて手紙も日記も書けない不自由な生活を余儀なくされることになった。十二月八日の真珠湾攻撃によつて戦争は勃発してしまつたが、その時、西田は何を考え、国の行く末についてどのような思いを抱いていたか、書簡や日記からは窺い知ることが出来ない。

しかし、いつ書かれたのか分からないが、昭和十六年の西田の日記の欄外に、次のような平野国臣の歌の引用がある。

君がよの安けかりなばかねてより身は花守となりけんものを

西田が記した歌の作者、平野国臣は幕末の勤王の志士で、優れた歌人でもあった。西田は平野国臣と自分の姿をこの歌の中に重ねたのであろう。幕末も昭和十年代という時代も、時局はめまぐるしく変化しており、平野も、西田も、その中で国を愛い世を憂えていた。平和な世の中なら、国粹主義者からの攻撃も気にせず、自由に自分の論を公に発表することができただろうに、今の世の中ではそれすらもかなわない……という西田の嘆きも託されていたのであろう。

2 戦況の拡大と友の死―昭和十七年

昭和十七年（一九四二年）の前半、日本軍による南方攻略作戦は予想以上の勢いで進む。マレーやシンガポールのイギリス軍は降伏、さらに、ビルマ（ミャンマー）を支配していたイギリス軍も日本軍の攻撃の前に撤退した。フィリピンでもアメリカ軍は退却、蘭印（オランダ領インドネシア）攻略も作戦開始から二ヶ月で完了した。

しかし、四月十八日には、東京を中心に川崎、横須賀、名古屋、四日市、神戸が米軍の爆撃機による空襲を受け、国民に大きな衝撃を与えた。さらに、六月五日には、ミッドウェイ海戦で日本海軍は大敗、戦局は逆転していった。

深まる戦局への憂慮

このような状況下にあつて、西田は、四月二十九日付原田熊雄宛書簡では「ソ独の戦争いかなり行くか」と、第一次大戦全体に目を向けている。また、日本の戦況に対しては、無限ではない日本の国力に対して、拡大の一端を辿る日本軍の姿勢への強い批判が読み取れる。五月十二日付原田熊雄宛書簡でも、西田の戦況認識とそれに対する批判的態度が濃厚に表われている。

……

トントン拍子に行つて居る如く見えるが扱さインド濠州と何処までもひろがり行つてどうなるものや。我国力とて無制限にあらざるべし。一面に深く自己に反省国内を調ふべき時にあらずや。然らざれば却かつて敵にひきづられるの恐あり。それにしても真に人心の一致といふことが必要なり。全くに無経験無知識でありながら何事にも干渉是非を問はず善悪を弁ぜずおのれ（の）意志のままにせうとするのでは国家の前途を害すること実に大なり。有識者は黙し居るも心中皆大に憂へざるものなし。私は実業家にも教育者にも逢ふごとに自己の信ずる所を直言し各自の職場を守つて国家に報ずべきを云ひ徒らに迎合すべからずと主張し居るなり。……

この頃の西田は、無計画に戦況を拡大していった政府・軍を批判するとともに、戦争終結のためにどのようなしたらよいかを考えていた。西田が考えていたことは、一刻も早い戦局の收拾である。そのためには、国を背負つて立つ為政者が戦局收拾のためにもっと真摯しんしに考えていくべきだと考え、新聞やラジオの煽動的な記事や報告に対しては深い嫌悪感をもちしている。三月二十七日付鈴木大拙宛書簡。

……

人生いつまで辛抱すべきかの言、真に然り、かう世界中の人狂ふては遂にいかがるのか。一人達識の人なきか。遂にノアの洪水来たらん。……

仏教学者・鈴木大拙は、四高以来の生涯にわたる無二の友であった。五月二十六日付堀
維孝宛書簡でも、次のように吐露している。

……杉森君の令息御遭難のよし何とも御気の毒之至りに堪へず。あの船には三井三菱
等の優秀なる技能者が沢山にのり居りしもの由、実に国家の大損害なるのみならず一
家々々ととりて何とも気の毒に堪へない次第とおもひます。誠に御手紙の如く一面の勝
利に酔はず内に深く反省せねばならぬ時とおもひます。今後此種の事少なからざるべし。
この大戦争をいかに始末するか。唯勝つた勝つたでといふ調子で何処までも行かず内政
外交に深く意を注がねばならぬとおもひます。当局者は如何に考へ居るにや。新聞など
実に浮調子にていやになる也。

六月七日付原田熊雄宛書簡では、次のように述べている。

……世界大戦実に其停止する所を知らず。始めたヒットラー自身もソ独戦争以来走馬
に跨つた如くひきづられ居るのではないかと思ふ。我国などこの大波に乗つて一步を誤
られば大変な事となるとおもひます。……然るに尚力にまかせて無理押しといふ所
あるのは遺憾に堪へませぬ。国家の中心に立つ人深くここに意を用ひざるべからず。い
づれにしても此大戦の始末は容易にあらず。……高木惣吉君は何処かへ変つた様
なり。如何なる仕事をするか。

この書簡に出てくる高木惣吉は、昭和十五年海軍省調査課長、昭和十七年六月には舞鶴
鎮守府参謀長に転任していた。その後、昭和十八年には海軍少将（海大勤務）、昭和十九年
には海軍省教育局長となり、東條首相の暗殺計画の立案、小磯内閣の米内光政（海相）や
井上成美（海軍次官）の密命による終戦工作などに従事した。海軍部外にも幅広い人脈を
形成し、昭和十五年十一月には、海軍の知識人集団であるブレイン・トラストを組織して
いた。

さらに、高木は、その前年昭和十四年二月に大磯の原田熊雄別邸で西田と出会い、九月
にも原田別邸で再度会うとともに、鎌倉姥ヶ谷の西田宅を天川勇（海軍嘱託）を伴って訪
ねている。さらに、十六年九月にも再訪し、京都にいる西田の弟子達を紹介してもらい、

いわゆる京大ネイヴィー・グループを組織した。海軍として、世界に通用する世界観をもつ必要があったからである。そこには、何とかして陸軍を抑え、日米戦を避けようする意図があった。十六年十一月に京都大学で行なった講演でも、高木は海軍のこの考えを述べている。

事実、この高木の依頼を受けて、西田の弟子達を中心とする京都学派の秘密会合が、昭和十七年二月から二十年七月にかけて十八回にわたって行なわれている。その会合は、時局の進展に伴い、その認識、国内外の思想状況の分析、戦争理念の模索、国策是正の提言、戦争の早期終結への方策、東條内閣打倒策、さらに、敗戦後の展望までもが射程に収められていた。会合の主なメンバーは、高坂正顕、鈴木成高、高山岩男、西谷啓治、木村素衛ら、京大文学部や人文科学研究所に属する西田の弟子達で、哲学や歴史学や教育学を専攻していた。彼らの先輩で哲学講座を担当していた田辺元も、この秘密会合にはしばしば参加していた。この会合が極秘に実行されたのは、海軍からの極秘情報が提供されていたためと、逮捕の危険が伴っていたからである。

この会合とは別に、世論に訴えるため、開戦後の昭和十七年、当時の『中央公論』誌上に、座談会「世界史的立場と日本」(新年号、ただし前年十二月下旬発売)「東亜共栄圏の倫理性と歴史性」(四月号)「総力戦の哲学」(昭和十八年新年号)が発表されている。さらに、これらの座談会はまとめられて、昭和十八年三月、中央公論社から『世界史的立場と日本』として出版されている。その背景には、海軍調査部の意向があった。

その最初に発表された「世界史的立場と日本」という座談会(出席者、高坂正顕、鈴木成高、高山岩男、西谷啓治)は、もとは、開戦前の昭和十六年十一月二十六日、京都円山「左阿彌」で行なわれたもので、本来は、いかにして対米開戦を防ぐかという意図が背景にあった。ところが、その約二週間後には戦争が勃発してしまったため、発表された時には、開戦を前提した形になっている。時勢を慮って、様々なカモフラージュもなされている。

その内容は、十九世紀的植民地主義による世界秩序は終わり、世界史は今や再構成の段階に移りつつあるという認識のもと、日本の立場を確立するとともに、それが独善的・排他的になつてはいけないというものであった。そこでは、(多元的)世界史の哲学に基づいた国策の論議を通して、ヨーロッパ諸国の帝国主義が批判され、日本の世界史的使命が強調されている。同時に、民族主義や人種主義、自由主義や全体主義を超越して、万邦が所得る新しい国際秩序の形成が必要だとしている。そのためには、世界史を多様な文化圏

に分けて考えるとともに、日本や東洋のモラーリッシエ・エネルギー（道義的生命力）を昂揚し、世界史創造の活力としていかなばならないというのが、この座談会の趣旨だったのである。ここでは、中国侵攻で見られた日本の帝国主義的行動も同時に批判され、民族相互の共存関係に基づく新秩序が求められねばならないと言われている。

だから、当時、この秘密会合や座談会の連絡役やまとめ役をしていた大島康正（戦後、東京教育大学教授・倫理学）が「大東亜戦争と京都学派」（『中央公論』昭和四十年八月号）で言っているように、これは、一つの歴史哲学的立場に戦争を誘導し、その道義的解決を図ろうとするものであったと言えよう。もともと、現実それが可能であったかは別であるが、少なくとも、この西田の弟子達の意図は、海軍と連携しながら陸軍の戦時国策を是正し、日本のあるべき姿の理論化を図ろうとしたところにあった。

実際、当時、高木惣吉の組織したブレン・トラストのメンバーでもあり海軍囑託をしていた高山岩男は、座談会の趣旨を敷衍して、「中央公論」誌上で「歴史の推進力と道義的生命力」（昭和十七年十月号）「総力戦と思想戦」（昭和十八年三月号）を書いている。

その京都学派の元締めとも言える西田も、置かれている状況の違い、世代の違い、発表する場の違いのため、主張する力点の違いがあるが、基本のところでは、弟子達と同じような世界観をもっていた。

もともと、高木惣吉の『太平洋戦争と陸海軍の抗争』によれば、高木が開戦前に西田宅を訪ね、「開戦は避けられない」と言った折には、「君たちは国の運命をどうするつもりか！ いままでさえ国民をどんな目にあわせたいと思う。日本の、日本のこの文化の程度で、戦いでもできると考えているのか！」と、西田に睨みすえられ、息が詰まったという。

だが、一方では、国粹主義者達や当局の監視の動きがますます厳しくなってくる。現に、翌年の昭和十八年五月には、京都学派の「世界史的立場と日本」を掲載・出版した中央公論社の編集者達が厳しい指弾を受け、七月号の休刊を余儀なくされた。さらに、この中央公論社の編集者達（畑中繁雄、浅石春世、藤田親昌など）は、翌十九年一月、在京編集者グループの一斉検挙で投獄されてしまった。いわゆる横浜事件である。

言論弾圧は次第に激しくなってきた。昭和十五年三月に上代史に関する著作で出版法に問われ起訴されていた津田左右吉（早稲田大学教授・東洋史）についても、西田は心配し、自由に言論を公にすることが出来なくなった世の中の状況を嘆いている。この起訴も、原理日本社の裏田胸喜の批判が出発点になったものである。実際、判決の報を聞いた昭和十七年四月二十八日付岩波茂雄（岩波書店主）宛書簡では、次のように書き送っている。

……尊兄及津田氏の件終始気にかかり居り人に消息を聞き居りますが未だ何事もなく、
而してそれが面白からぬ徴候とは誠に困つたことと存じます。……

岩波自身も、津田と同時に起訴されていたのである。もともと、判決が意外と寛大だった
ので、安心もしている。五月二十二日付岩波茂雄宛書簡。

今朝新聞の判決を見た。案外寛大であつた。これで検事の控訴なくしてすめばよいが。
司法官には尚正心あると見ゆる。

一方、西田の四高時代および学習院時代の同僚で英文学の田部隆次宛書簡（九月二十六
日付）からは、再び召集された息子・外彦を心配している様子が分かる。

……

愚息は此の戦役の始より召集せられ一年半ばかり帰りましたが昨年七月又召集せられ
満州から台湾へ廻され比島戦争の最後まで加はりて尚比島にあり Deng 熱より神経病を
起して尚困り居ります。

山本君急死。私も誠に淋しく思ひ居ります。唯何とかして息子が無事帰り来るまでと
存じ居ります。

この書簡にもあるように、昭和十七年七月十二日には、無二の親友であつた山本良吉が
死去している。その報に接し、西田は号泣したという。西田は翌日の日記に、

……多年の親友胸迫り言ふ所を知らず。……

と記している。そして、西田は次のような歌を残している。

君去りて誰と語らむかずかすの思まつはこの頃の世や

昭和十七年（一九四二年）八月に始まったガダルカナル島の戦いは、翌十八年（一九四三年）二月に、激戦の末、日本軍の敗退という形で終わる。その後も、五月にアッツ島守備隊が玉砕、次第に日本の敗色が濃厚になっていった。その原因には、もともとわが国の国力が劣っていた上、補給に欠陥があり、さらに陸軍と海軍の長年にわたる抗争分裂などがあつたことによるであろう。

そこで、大本営は作戦の見直しに着手、広がりすぎた戦線を縮小し、「絶対国防圏」を設定して、米軍の侵攻を迎え撃とうとした。しかし、その一方で、軍事支出は天文学的数字に達し、国民生活は首を立てて崩れていった。また、十月には、「在学徴集延期臨時特例」が公布され、徴兵適齢期を迎えた文科系学生は直ちに徴兵検査を受け、入隊を義務付けられた。この学徒出陣による総数は、全国で推定十万人以上にも上った。

日本主義者達から非難される

このような状況下、西田達の理論は、相変わらず日本主義者達から危険視されていた。それに対して、西田は、日本主義者の非難に強い決意をもって抗つていこうとする覚悟の程を、個人的な書簡のもとでもらしている。西田は、日本主義者達が表面的にしか内容を把握せず、西田達の理論の真髄を全く理解していないと嘆いている。二月八日付滝沢克己宛書簡では、以下のように書いている。滝沢克己はキリスト教系の哲学者で、当時九州大学で教鞭をとり、西田哲学に早くから傾倒していた。

……日本の思想家者といふのは理解する前に先づ非難する様です。私は個人主義者で個人の救済を主とすると非難せられて居るさうです……。佐藤通次など日本精神は見るのではなく聴くである、天皇随順だと暗に私を非難する様だが、私の見るといふのは佐藤のいふ如き浅薄の意味ではない。

ここで言及されている佐藤通次（九州大学教授・哲学）の所論は、その後、東京堂発行の雑誌「読書人」（昭和十八年七月号）の「特輯哲学書批判」で、「見るものから聴くものへ―哲学の根本問題につき西田博士の教を乞ふ」という論文に発表されている。この特集号は、京都学派の哲学への攻撃が目的であった。

論文を非難されたのは西田だけではない。弟子達も、同様に日本主義者からの非難に苦しんでいた。五月二十四日付高坂正顕宛書簡では、西田は次のように書き送っている。

君の中央公論の論文をよんだ。あんな連中相手にせないとよからう。私は我国のもつと根本的勢力の方からだんだん分つて来るのではないかとおもふ、……

この高坂の論文は、昭和十八年六月号の「中央公論」に掲載された「思想戦の形而上的根拠」という論文であった。その内容は、新秩序の形成への戦いは、内には新しい人間形成と、外には諸民族に史的位置を与える構造の確保が必要とするものであった。このような言論が、その世界的立場ゆえに、雑誌「読書人」などを通して、国粹主義者からの厳しい批判にさらされていたのである。彼らからすれば、京都学派は、皇国を世界史の特殊な一類型に陥れるもので、このような西洋的・自由主義的考えは糾弾されるべきだとみなされた。高坂の論文をはじめ、西田の弟子達の「中央公論」に掲載された論文は、これが最後になり、西田らへの非難の嵐はますます強くなっていく。七月十三日付熊野義孝宛書簡からは、相も変わらない思想界や日本主義者による批判への苛立ちが読み取れる。

……現今の如き思想界の状態、尊兄等誠に御困りの御事と深くお察し申し上げます。私などにも此頃例の偏狭な日本主義者のために攻撃の焦点となつて居ります。誠に深く大きく国家の為を思はば尚少し真に永遠なるものを念とすべきだと存じます。……

熊野義孝は神学者で、当時武蔵野教会の牧師であった。

七月十五日付柳田謙十郎宛書簡でも、佐藤通次らによる西田批判が「読書人」で行なわれたため、それを警戒する様子が読み取れる。

……「読書人」の件昨夜聞く所によれば背景に少し重大なるものある様につき一応見て置き度一寸おかし下さいますまいか。

西田の弟子、柳田謙十郎は、当時大谷大教授として哲学を講じていた。

当時の雑誌「読書人」は、日本主義者達が結果して、マルクス主義や自由主義、京都哲学などを批判する言論・思想誌の一つであった。その論調を利用して、特に陸軍報道部や

特高の言論弾圧が激しくなっていた。現に、「読書人」の京都哲学批判特集号にも、陸軍報道勤務の阿部仁三が、高坂や西谷の「世界的立場」を糾弾している。その他、この号には、三井甲之「(西田哲学)に就いて警戒すべき諸点」、田中忠雄「文化類型学批判― 蛆たかる哲学的頭脳」、紀平正美「(無)概念の弄び」などがある。佐藤通次の論文も、この号に載っている。

この年には、すでに西田逮捕の噂も流れ、情報局や陸軍報道部からの圧力、さらにそれに支持される皇道主義者からの西田の弟子達への脅迫など、目に余るものがあった。鎌倉の西田宅の周りにも、私服の憲兵や特高が徘徊するようになったという。

西田の昭和十八年七月十二日の日記にも、

夜高山、西谷、鈴木来訪(舞鶴の報告)。

とある。これはおそらく、当局からの目に余る圧迫に耐えかねて、京大ネイヴィー・グループの三人が、舞鶴にいた高木惣吉に相談しに行った報告だったのであろう。この時、西田は京都の旧宅に帰っていた。

十四日の日記にも、

……高坂、高山、鈴木、西谷、木村来訪(毎日新聞から通報)。

という記事がある。この毎日新聞からの通報は、やはり陸軍報道部の不穏な動きに関することであつたであろう。西田は、弟子達と夜、鳩首対策を講じたと思われる。西田とその弟子達は、危険な状態に置かれていたのである。

八月二十五日付堀維孝宛書簡でも、鈴木大拙が出した本の内容について憂慮している様子が窺える。

……公論は見ませぬが此頃の雑誌は見る気にもなれま(せぬ)。何だか世が切迫して来た様におもはれます。

大拙の「文化と教育」といふ書はまだ見ないがどういふ本か「文化と宗教」との誤ならずや。大拙はあまり無遠慮に書くので少し心配して居る。……

「公論」がどんなことを云つて居るか、御手許にあらば一寸見せて下さい。

この頃、「原理日本」や「読書人」とともに、第一公論社の雑誌「公論」でも、西田や弟子達の論が攻撃的になっていった。九月一日付高坂正顕宛書簡では、「公論」の記事の内容に立腹している西田の様子が生々しく見て取れる。

「公論」の事、実に言語道断。断じて断じて此等奸悪の者共の手にのるべからず。その奥にどういふ事があるのかも知れぬ。決して決して相手にすべからず。あんなに人を馬鹿にしてゐてそんな事を云つて来るなどを愚弄するも甚しい。何かうまい気調子取りを云つて来ても取り合はぬ様にし玉へ。もう此頃のあんな雑誌編輯者などに逢はぬ方がよい。「公論」などあの方の隊長ではないか。九月の公論でもまだやつて居るでないか。高山にも此事よくよく云つて下さい。

また、九月九日付高坂正顕宛書簡では、思想界の今後を憂い、排外主義が広がる日本においては、西田達のような理論が受け入れられることはもはや難しいと感じていたことが窺える。ただ、弟子達には、時流に屈せず、自分の学問を公に堂々と発表すべきだと伝えている。九月二十日付高坂正顕宛書簡では、思想攻撃に屈してはならないという西田の強い決意が表われている。ここでは、宗教裁判にかけられたガリレーや火あぶりの刑にあったジョルダーノ・ブルーノのように、自分の学問が理解されず、たとえ逮捕されようとも、最後まで自分の信じることを論じ続けるべきだという意味のことを述べている。

……：學術書はどんどん出すがよい。正々堂々何の恐れる所はない。これが学者として真に国家に尽す所以である。たとへガリレーやブルーノの運命に陥るとも。

国策研究会に巻き込まれる

ところが、昭和十八年三月以来、西田のもとには、陸軍と密接な関係がある国策研究機関、国策研究会の矢次一夫（陸軍省嘱託）が来訪するようになる。これは、金井章次（元蒙疆政府最高顧問・医学博士）や田辺寿利（元蒙疆学院副院長・社会学者）の仲介によるものである。金井や田辺は、西田哲学に傾倒していたアジア主義者で、ともに矢次の国策研究会に参画していた。木村素衛（京大文学部教授・教育学）宛書簡（五月六日付）でも、国策研究会が西田の意見を聞きたいという趣旨を伝えてきたことに触れている。

……国策研究会といふものから少し意見を聞きたいと云ふのでそれが人の都合上この二十日過ぎてないとむつかしいとの事情が有りのびのびになつて居ります。……

実際、この話は五月十九日の会合となつて実現している。五月十九日付の西田の日記には、次のように書かれている。

国策研究会に行く。夜東京から自動車にて十一時過帰宅。佐藤〔賢了〕軍務局長、永井柳〔太郎〕、下村海南等。

これは、築地の料亭で「西田先生の教えを仰ぐ」というような形をとつて、国策研究会が開いた会合のことである。この会合では、佐藤軍務局長以下、情報局総裁・天羽英二、前内務大臣・湯沢三千男、永井柳太郎、後藤文夫、下村海南、大藏公望など、軍や大政翼賛会の大物達が西田の話聞いている。しかし、この会合の最初から、西田は、今の軍がやっていることは帝国主義ではないかと言つて、大変な剣幕で陸軍の連中を批判していたという。

ただ、西田の話は難しく、よく分からないので、その後話された内容を論文に書いてもならないかということになる。その論文は、日記によれば五月二十八日には書き終わり、田辺寿利に渡されている。

六月十二日付堀維孝宛書簡でも、国策研究会から依頼されていた論文が書き終わったことを告げている。

……私は前に一寸申上げた用事にて引ばられてあましたがもう一応それもすみ十日頃に掃落いたす支度を致して居りました処又議会前に是非逢つてくれといふ人あり。今にくつぐ致し居り、議会始まる十五六日には私だけは是非掃落致度存じ居ります。

東條などフリッピン等ずつと廻り来り多分考が變つたらしい。これを機会として明〔る〕い方へ向いて行けばよいかと存じます。果たしてどうか。……

西田はこの論文を通して、「世界の中の日本」という考えのもと、当時の日本が進みつつある方向の是正を図ろうと思つたと思われる。

ただ、矢次一夫の言うところによれば、国策研究会の矢次が陸軍の意を介して西田に論文を書いてもらおうとした背景には、当時日本主義者から上がっていた「西田を逮捕せよ」という声を鎮め、西田逮捕を阻止するという目的があったという。このことは、西田はもちろん、田辺も知るところではなかった。

このことは、戦後、矢次が自ら主宰する機関誌『新政』（昭和二十九年第二卷一・二号）で、「西田幾多郎博士との交渉」と題して明らかにし、その後、これを『昭和人物秘録』や『東條英機とその時代』にも載せている。ところが、この記事を材料に、大宅壮一が『文芸春秋』（昭和二十九年六月臨時増刊号）で、「西田幾多郎の敗北」と題して、西田は身柄の安全と引き換えに自らの魂を売ったのだという捏造記事を書いた。そのため論争になり、矢次はこれを否定、信州にいた金井章次も『信濃毎日新聞』（昭和二十九年六月四日付夕刊）で批判、直弟子の高坂正顕も『中央公論』（昭和二十九年九月号）で批判した。高坂の『中央公論』の批判文は、「西田幾多郎が魂を売ったという大宅壮一氏の戯曲について」というもので、大宅の記事は大宅の創作にすぎないと断じた。また、それを敷衍して、雑誌『心』（昭和二十九年九月号）でも、「西田幾多郎博士と『世界新秩序の原理』の由来」と題して、その経緯を明らかにしている。

「世界新秩序の原理」というこの論文は、東條首相の演説に使用される予定のものであった。そのため、五月二十九日付田辺寿利宛書簡では、西田が論文の状況を気にしている様子が見て取れる。

表題の所を

「世界史的世界形成即ち世界的世界形成主義」として置いて

そのいづれを取るか先方に任せてもよいかと思ひます。いかが

……けふの新聞を見ると相当急ぐのではないでせうか。

五月十九日の国策研究会の会合で、西田は、「日本の根本勢力から分らせよう」と思ったからであろう、自分の考えを佐藤軍務局長達の前で述べた。しかし、それだけではよく分からないと言ってきたこともあり、五月二十五日からこれを論文の形にしている。さらに、六月三日付田辺寿利宛書簡では、田辺を通して佐藤軍務局長宛に論文の要旨を送っている。その要旨をさらに要約するなら、大体次のようなことであった。

……真の世界的世界を構成すると云ふことは、各国家民族がそれぞれの世界史〔的〕使命を自覚して、各自自己を越えて、それぞれの地域伝統に従って、一つの特殊的世界を構成し、而して斯く歴史的地盤から構成せられた幾箇かの特殊的世界が結合して、真に一つの世界的世界を構成することである。世界的世界に於ては、各国家民族は、それぞれの歴史的使命に生きることによって、一つの世界に結合するのである。……

世界的世界構成の順序として、各国家民族が各自の世界的世界的使命を自覚して、地域的伝統に従って、一の特殊的世界を構成せなければならぬ。これが共栄圏の原理である。……今や東洋各国家民族がその世界史的使命を自覚して、一緒に東洋的文化の理念を提げて立たなければならない。……

もつとも、この西田の手になる論文の要旨が田辺のもとに残っていたということを考えれば、この要旨が田辺から佐藤軍務局長に渡されなかった可能性もある。

西田は、〈共栄圏〉という言葉で、いわばアジアの共同体形成の必要を述べているが、それは、あくまでも、民族それぞれが独自の文化を発展させることで成り立つ秩序と考えていた。西田にとつて、世界新秩序は、諸民族の集う創造的場所でなければならなかったのである。

六月十四日付堀維孝宛書簡では、東條首相の演説に自分の論文がどれだけ理解された上で使用されているかを気にしている。とともに、相変わらず西田がかねてから唱えている〈世界の中の日本〉という考えが国粹主義者からの攻撃を受けることを心配している。

前便にてお送りしたものを御一覽願ひます。明日の声明にどれだけ影響するか。

果してどれだけ取り入れられるかが心細いが、若しこれが分〔か〕ると色々の有象無象から攻撃の種となると思ひます。……

この東條首相の演説は、実際には、六月十六日の第八十二帝国議会で「大東亜建設新施策」として行なわれている。

六月十四日付和辻哲郎宛書簡からも、日本主義者からの非難に対する憂慮が読み取れるとともに、東條の演説には、西田本人の論文ではなく、国策研究会の田辺寿利および金井章次によって書き変えられたものももたっていることが分かる。

……別紙の基は意外の関係にて陸軍の方から頼まれ書いたのですが、これは金井章二〔次〕、田辺寿利二氏が私の書いたものによって書いたものに過ぎませぬ。これが世に分かれれば有象無象が攻撃の種にすること存じます。どうか色々御注意をお願いいたしますとおもひます。私は偏狭な日本主義者に対して日本精神に世界性のあることを主張したいとおもふのですがよきお考材料もなきか。……

西田のこの論文は、他人の手で書き直されていたのである。書き直したのは、主に田辺である。田辺はアジア主義的立場から書き改め、それを謄写版で百部刷り、西田に二十部届けている。堀や和辻に西田から送られたのは、この書き換えられた謄写版刷である。ここでは、すでに民族中心主義や帝国主義批判の部分は削除されてしまっている。この書き直された論文は、矢次を通して、陸軍や政府の各部局へ配られた。矢次の『東條英機とその時代』によれば、配布された先は、陸海軍大臣、次官、軍務局長、参謀本部と軍令部長と各第一部長、および外務大臣、情報局総裁、首相、書記官長などだったという。

しかし、六月十八日付堀維孝宛書簡では、東條の演説に自分の理論が全く取り入れられていないことが分かり、憤慨する西田の様子が読み取れる。

……新聞を見て実はいやになった、私の理念は何も理解せられていない。何も入ってこない。

私は表現はとにかく根本の理念の確立を望んだのである。

六月二十三日付和辻哲郎宛書簡でも、次のように言っている。

……東條の演説には失望いたしました。あれでは私の理念が少しも理解せられておないうとおもひます。(無理もないことだが)唯珍らしくも陸軍が私などの考を求めたことで御座います。何とかだんだんにも多少でも分つていってこれればとおもひますが果たしていかが。

もつとも、矢次一夫は、他にも論文の執筆を依頼していたようであるから、西田の論文だけが東條の演説の下敷きになったわけではないであろう。かなりの範囲で起草文を集め、それらをもとに官僚が作文し、首相演説に仕立てることは今日も行なわれていることだか

ら、西田の意見が入らないことがあっても、それは無理もないことである。

実際、『矢部貞治日記』（昭和十八年八月十八日付）によれば、海軍のブレイン・トラストをリードしていた矢部貞治（東大教授・政治学）にも、その後、矢次から論文執筆の依頼があり、矢部もこれに応じている。これらの論文は、十一月五、六日に開かれた大東亜会議での「大東亜共同宣言」の下敷きになつていく。しかし、「大東亜共同宣言」については、西田は、日記でも手紙でも何ら触れてはいない。また、「大東亜共同宣言」に西田の論旨（世界的世界形成主義）が考慮されていたわけでもない。

この「世界新秩序の原理」の元論文は公表されることはなかったが、西田は、親しい弟子達と相談し、これを書き直し、書き加え、それを別の謄写版にして読んで貰おうとしている。西田は、これ以上日本主義者の攻撃の的になることを避けるため、この元論文は西田と親しい者だけに渡し、理解してもらおうつもりだった。ところが、田辺寿利らは岩波の「思想」に載せようと提案してくる。それに対して、七月十日付、八月一日付、十月二十八日付田辺寿利宛書簡では、西田は次のように述べている。

……例の「世界新秩序の原理」をこちら若い連中とも相談して二十四五頁程書きました。これを此の前の如くこのままにて先づ謄写版にいたしたいとおもひます。謄写版にて最大どれ位できますか。この前より多くほしいと思ひます。已むなくば仮印刷にするか。……

……あの原稿昨日のお話の如き次第なら、尚一度御返し下され度お願申上げます。お急ぎかと存じ書きましたもの故、尚よく考も練り増補も致度と思ひますから。

本日お話の件、いづれ金井氏と御一緒の節、よく御相談申上げたいと思ひますが、余程慎重に考へないと、有象無象をさわぎ立たせるに終るかと思はれますが。

また、当時法政大学教授をしていた谷川徹三宛書簡（十二月十四日付）では、「世界新秩序の原理」を「思想」に載せてもらいたいとする田辺や金井の申し出について相談している。そこでは、西田は、国粹主義者達の攻撃の的に進んでなることもないと考えていたようである。

けふ田辺寿利君が来て例の私の「世界新体制〔秩序〕の原理」を先づ「思想」に出してもらひたいと云ふ。いかげんのものでせうか。又有象無象を騒がすにしてみたらぬと思ふ。よく慎重に御考へ下さい。金井氏どういふ考にや。同氏なども進んで希望せらるるにや。

結局、これは「思想」には載せられなかった。ところで、昭和十八年五月二十四日付の西田の日記には、

金井、田辺来訪。……カマクラ警察署長、特高来訪（知事の命により）

とあり、五月二十五日には、

草稿書きはじむ。

という記事があり、五月二十八日には、

田辺来たり「世界新秩序の原理」原稿渡す。

とある。五月二十四日の金井、田辺の訪問は、五月十九日の国策研究会での講話を建議書の形にして欲しいという最終的な依頼であったであろう。また、鎌倉の警察署長と特高の来訪は、内務省の意向によるものであるから、五月十九日の会合での講話に対する謝意と、もしかしたら、今まで西田の身辺に及ぼしていた圧力への陳謝があったのかもしれない。

しかし、その後も、京都にいる西田の弟子達への圧迫や脅迫はやむことはなかった。なるほど、『矢部貞治日記』（昭和十八年八月十三日付）によれば、この頃、海軍調査部からの申し入れて、陸軍報道部も京都学派への圧力を緩めることになったようである。だが、『高木惣吉日記』（十月三日付）によれば、この時期でも、西田の弟子・高山岩男が苦衷を訴えているところをみれば、なお西田の弟子達への無道な圧迫は続いていた。実際、十八年八月には、国粋主義者の齋藤响（しやう）などが京都学派を反戦論者として告発する用意をしているという情報が、朝日新聞の記者・土屋清と一高教授の日高第四郎から、高山岩男には届いて

いた。

文教政策への苛立ち

西田は文部省や文教政策に対しても、批判している。例えば、教育学者の下程勇吉宛書簡（八月十二日付）では、西田の一哲学者としての文部省に対する苛立ちが読み取れる。

……唯とにかく我国文教の指導者となつて居る（国家がさう定めて居る）国民文化の人々や文部の督学官教学官といふ人々がかの如き下劣な態度には我国の文教の前途いかなり行くかと存じます。……

西田は、世論の大きな流れに追従し、本来あるべき姿を失くしていく文部省に失望するとともに、これからの日本の思想界がどうなっていくかに大きな不安を感じている。

この年十月には学徒出陣が始まったため、大学を通常通りに運営することは困難になっていった。大学を続けることもできず、学生が戦争にかりだされる世の中になってしまったことを、西田は嘆いている。大学は、機能を失っていったのである。九月二十五日付の娘・西田静子宛書簡では、大学が閉鎖になり始めていることが読み取れる。

……昨今の新聞にもある様にもう大学も閉鎖同様になり日本もだんだん容易ならぬことになつて行くと思ひますのでお前もその覚悟にて何事も容易に考へてみてはならない。……

十月一日付和辻哲郎宛書簡でも、

……今度の事にて大学は大変でせう。どうなさいますか。講義はやはり御継続になりますか。……

と書いている。

さらに、静岡師範教授・島谷俊三宛書簡（十月二十五日付）からも、文部省に対する苛立ちが感じられる。声の大きい方に迎合して、文部省も、西田らの学問・思想を問題にしただしたのである。

……文部省には誠に誠に困ったものです。教学官とか督学官といふ人々が一派右傾団体の人々と一緒になつて学問の攻撃をするのですから。……

4 戦況悪化を嘆く―昭和十九年

昭和十九年（一九四四年）、戦局はいよいよ重大局面を迎える。マリアナ沖海戦の大惨敗による日本海軍基本戦力の壊滅、これによるサイパン島守備隊、テニアン島守備隊、グアム島守備隊の玉砕。インド国境でのインパール作戦も、無残な敗退となつた。そのため、昭和十九年七月、東條内閣は総辞職。後継首班には、朝鮮総督の小磯国昭（陸軍大将）が就任、同時に米内光政（海軍大将）が副総理格の海相として入閣し、七月二十二日連立内閣が成立した。しかし、秋には、アメリカ軍の本土空襲が本格的に始まる。はじめのうちは軍需工場などを主な標的としていたが、年が明けると、次第に無差別爆撃へと切り替わっていった。空襲は国民生活に壊滅的な打撃を与え、疎開が始まつた。

濃くなる敗色への心痛

一月十八日付柳田謙十郎宛書簡からも、何時まで続くか分からない戦争の世の中を悲観し、絶望を感じている西田の様子が読み取れる。

……今日の如き有様に行つてどうなるものか。歴史はこんな時代も度々だったのであらうが嘘の嘘の世の中だ。……

しかし、西田は、絶望しながらも、哲学者として今出来ることに集中していこうとしていた。二月九日付堀維孝宛書簡では、次のように書いている。

……だんだん切迫してくる様だ。我々のかくものもどうなるか知らねど先づ頭からでてくるものだけ書いて居る。……

さらに、四月十六日付田辺寿利宛書簡では、相変わらず、京都にいる弟子達に対する日

本主義者達からの思想攻撃について憂慮している。

京都のものの執筆禁止とかいふ噂を耳にしますが何かお聞きになりませぬか。

また、七月三日付木村素衛宛書簡から窺えることだが、西田は、後先を考えずに戦況を拡大していった政府や軍の愚かさを嘆くとともに、それに盲目的に従っていった国民に對してもやるせなさを感じている。

……サイパンの方大概想像し居ります。愈^{いよいよ}私共が最初から心配してみた様に迫つてきたのではないかとおもひます。一に為政者の先見の明なきの致する所、国家を亡すものは何人か。……

……今の如き無批評的な盲目的な国民では何とも致し方ありません。

同じことは、七月三日付長与善郎宛書簡からも知られる。長与善郎は、学習院高等学科時代の西田の弟子で、木戸幸一や原田熊雄ら学習院グループに属していた。白樺派の小説家である。

……我国の状況私共書齋の老書生が最^{もと}始から憂慮し居りました如き所へ段々切迫し来たれる様に思はれ誠に痛心の至りに堪へませぬ。一に我国為政者の先見の明なきの致す所、今となりては尊兄の如く行く所まで行くより致し方御座いませぬ。明治以来我朝野が多少の成功に眩惑せられ、足実地につかず何事も容易に甘く考へた結果と存じます。今こそ空威張りや空虚な御題目をすてて真剣に立ち直らねばならない時と存じます。何としても国民がもつともつと実着にならねばならないと存じます。実に実に大事な時です。……

昭和十九年七月、東條内閣が総辞職し、小磯・米内連立内閣が成立した時も、西田は、海軍出身である米内に期待するところがあった。七月二十八日付堀雄孝宛書簡からも、西田はこの内閣に期待をもっていたことが伝わる。戦局取捨派を擁する海軍の意見が少しでも取り入れられることを望んでいたであろう。実際、西田の弟子達も、海軍調査部の高木惣吉の画策のもと、すでに終戦の立案に入っていた。

……委曲いろいろ御知らせ誠に難有御座いました。私は小磯といふ男に多少疑念を有つてみました。御手紙の様なら先づ現在の陸軍の方としては外にもなからうと存じます。従つて小磯米内のコンビといふのはその外に考へようもなくベストを尽したのかと思はれます。併し聯合内閣といふものは中々むつかしきもの也。さてこれでできるだけベストを尽して行つて中々容易ならぬ事と存じます。大分手遅になつてゐないだらうか。東條などもつと早くやめたらよかつたらうに。

しかし、この頃は、西田の弟子達はその言論を公表していた「中央公論」も、七月号をもつて、陸軍報道部の圧力で廃刊に追い込まれてしまつた。そればかりか、社そのものが、改造社、日本評論社などともに解散させられてしまつたのである。

それどころか、西田や京都学派を執拗に糾弾していた「原理日本」も、この年の一月号をもつて廃刊にされている。これには、その前年昭和十八年二月に、田所廣泰など、原理日本社の青年達の一部が検挙されたことも響いていたであろう。彼らは、東條政権の戦争遂行の無策を批判し、倒閣運動に踏み込んでいったからである。この点では、海軍の一部とつながつて、同じ東條内閣打倒策を検討していた京都学派と奇妙に一致している。昭和十九年に入ると、東條内閣批判は各方面から起こつていたのである。

京都学派を攻撃していた「読書人」も、この年四月に廃刊を命じられている。

国体論を書く

この年、西田のもとには「国体」について論文を書いて欲しいという勧めがあり、西田は国体論（「国家と国体」）を書く。西田は、当時やかましく叫ばれていた「国体」（国の成り立ち）を学問的に基礎付ける必要もあると考えていた。しかし、当時の国粹主義者達が主張しているのは違つて、家族の延長として国家をとらえることは出来ないと考えていた。三月七日付田辺寿利宛書簡でも、

先日の原稿「国体」、務台理作君が見たいと申しますから金井氏御一覽の上御返し甚だ御手数ながら何卒御願ひ申し上げます。

と言つている。

しかし、三月十日付長田新宛書簡では、国粹主義者達の攻撃的になることを避けるため、西田は、国体論を公にする気になかったことが読み取れる。

……私を陥入れるべく狙ふもの多き時節故今発表する考は御座いませぬ。……

長田新は、当時広島文理大教授として教育学を担当、自由主義に基づいた教育の理想を追究していた。

同じく、三月十五日付和辻哲郎宛書簡でも、論文を今発表すると他から攻撃されるかもしれないと心配している。

……色々の人が来て私に国体といふことを書けと云ひますから私の哲学的立場から別封の様なものを書いて見ました。今発表してはいかかとも存じますが一寸御一覽下され御考承り度存じます。

法律学者が簡単に我國体を家族的と云つてすまして居る様ですが *Recht* (法) といふものを何処から出すのでせうか。又学問でも宗教的でも何でも国体を基礎として国体からと云ふ様ですが、国体といふものを概念的に明にして置く必要なものにや。……

西田は、法律学者が簡単に解釈してしまっている国体というものを、もっと深く考えていく必要があると考えていたのである。弟子達からは、この西田の国体論を見せて欲しいという依頼がかなりあった。しかし、そのために謄写版にすることさえ、西田は恐れている。五月二日付柳田謙十郎宛書簡でも、次のように言っている。

或人があの原稿を青木東亜相などに見せたいと云ふので（然るに此頃謄写版にするといふことすら警察などやかましい由故）田辺寿利君が更に手写して見せたいといふから尚暫くお貸しく下さい。……

西田は、単に国家を家族国家とはとらえず、国家も家族も、それらを超える宗教の方からとらえようとしていた。西田においては、宗教的なものは世界の歴史的形成の源泉であり、そこから国家や個人の創造性も出てくると考えられていたのである。五月十九日付柳田謙十郎宛書簡でも、以下のように述べている。

……あれは色々云はれるだらう。私が日本を家族国家と云はないのが色々誤解が起ると云ふ人がある。それで一寸注をかけた。元来家族そのものがその成立に於て宗教的でなければならぬ。……

ところが、文部省は、この頃西田哲学を問題とし、特にこの西田の国体論について調査しようとした。六月二十八日付柳田謙十郎宛書簡でも、

……国体論の事決してお氣にかけ下さない様に、務台君が私の原稿により直接文部当局に説明すると云つてみました。私も時機を見て公表する積りで御座います。唯文部といふものが時の風向しだいでいろいろ変るので信用のできるものでは御座いませぬ。

と言っている。しかし、文部省としては、表向き「調査した」という格好を取っていただけのようなのである。七月二十八日付高坂正顕宛書簡でも、次のように書いている。

……務台君の話に五月頃から文部省に思想審議会とかいふものできその中わたしの審議をいたし居る由。二三次も会議が御座いました由。伊藤吉之助、山田孝雄、高田保馬など何か訳の分らぬ非難を致します由。併し務台君（同君も審議の一人の由）の話によれば別に憂ふべき兆候も見えず。その内うやむやになるのではないかと、の事、盲者象を評する如く分りもせぬ徒輩が失礼至極と存じ居ります。いつか尊兄の御話の如く文部は別に悪意を持ちてゐるのではないらしい。何か外から云はれるので防禦のためらしい。……

ところが、国粹主義者や当時の世論の影響もあつてか、文部省は西田の弟子、西谷啓治や柳田謙十郎の学位授与を十月になつても延期しており、それに対して西田は憤りを表わしている。十月二十三日付務台理作宛書簡では、こう書いている。

……天野君の手紙によれば文部の総務局で九月中に西谷、柳田の学位を発表すると西崎前大学課長より落合部長の方へ申して来ましたが今に発表せられず。高坂君が先日文部に行き例の近藤に逢ひました処もう暫く待てとか云つてみました由。何が何

やら分りませぬ。一体何処に本当があるのか。何故にあの両君が前科者か何かの様にそんな問題になるのか。

学問や家族への思い

しかし、西田の学問への意気込みは衰えることなく、この頃も、学問と思想の確立を、自分自身はもちろん、弟子達にも期待していたようである。七月二十日付滝沢克己宛書簡からも、西田の学問に対する思いが伝わってくる。

……戦局もだんだん切迫して来た様です。国家存亡とあれば何事も致さねばならぬが要するに我々は学問思想の方にて国家に尽すのが自分の本分を尽し真に国家に尽す所以と存じます。何卒そのお心がけにてできない中にも御勉強、他日の用に供せられんこと切望の至りに堪へませぬ。哲学の方にも今後何とかして日本に雄大な日本哲学が発展せねばならぬと存じます。九大の哲学といふのは鹿子木、佐藤通次などに蹂躪せられ実に慨嘆之至りに堪へませぬ。何とかして尊兄などの力によつて少しにしても正しいよい方へと念じ居ります。

この書簡に出てくる鹿子木とは、鹿子木員信（九州大学教授・哲学）のことで、当時、大日本言論報国会の専務理事・事務局長をしており、皇国思想に基づく言論弾圧の理論的根拠を与えていた。

また、十月二十一日付滝沢克己宛書簡では、すでに戦争の済んだ後を心配し、その時学者が果たさねばならない働きについて考えを述べている。

……戦争のすんだ後では一時学問など全く（人がなくなり）衰微の時期がくるだらうとおもひます。その節之を回復して次の時代を起すのは今までの間に一通りでき上がった人々の任とおもひます。

衰弱する身体と娘を思う親の姿

さらに、九月二十二日付堀雅孝宛書簡でも、西田の生活の状況が生々しくつづられている。

……私は不相変の状態だが私も本当に、やせた。自分で股や肩や腹などをなでて見ると真に骨立、骸骨そのままで。これは全く肌皴の状態なのであらう。何だかもう長くもいかがかとおもひ時には遺書をかいて置かうかなと思ふこともある。併し毎日仕事はやつて居る。書きたいことは次から次へと出てくる。ここに私の生きて居る意味があるのだと思つて生死を超越して午前中は没頭して居る。午後になればもうつかれる。前は遠く散歩に出かけたが足がわるくて唯近くの海辺を少し歩いただけだ。その故極めて単調で退屈だ。いろんなものを少しあれもこれも雑読否雑覽して日をくらし居る。人の来る時は人が来るが此頃もう大体あまり来ない。尊兄などちと来てもらひたいが此頃の様に電車がこんでは誠に気の毒だ。私はもう他にいくことを全くあきらめた。息の所へ一度は行かねばならぬと思つてゐたがもうそれも全くあきらめた。……

一方、娘・静子は、当時京都の西田の旧宅で、療養もかねて絵を描きながら暮らしていた。そこで、西田は、弟子の植田寿蔵（京都大学文学部教授・美学）らに頼み込み、静子を大学で働かせてくれるようにした。二月二十日付西田静子宛書簡では、ともかく働くことを勧めている。

……一人でぶらぶらして居ると微用など来ないともかぎらぬ。

体を大事にして何でも少し働くがよろしい。精神のためにもよい。けふ久保と外彦と来て金のこともよく相談した。

私が四月帰つて万事委しく話す。

実際、西田の説得や配慮もあって、静子は京都大学文学部美学教室で働くことになる。

西田は、その世話をしてくれた植田に対して、丁重な手紙を送り、娘を大学で使つてくれたことに対して礼を述べている。三月四日付植田寿蔵宛書簡では、

……静の事につき御配慮下され御厚情誠に誠に難有深く深く御礼申し上げます。何卒御配慮なくさびしく御指図御使ひ下され度お願申し上げます。報酬などの事は必ず必ず御配慮下されまじく。私もだんだん老年に相成りもう何時死んでも思ひ残す事なしと存じ居りますが、唯心にかかるはかれの事のみで御座います。健康はもう人なみとなりましたがもはや婚期も遅れ今後何でもかれ相応の仕事をいたし行く様致し度と存じ居るので御

座います。何分よろしく。御礼まで。

と述べている。三月四日付西田静子宛書簡でも、娘を思う強い親心が表われている。

天野君の所からかういふ手紙がまゐりましたから。天野君に逢うてよく話を聞き指図を受けてその通りに早速文学部に行つて落合君（部長）を尋ねよくお礼を申しなさい。落合君が留守なら生駒書記に御礼を申し述べなさい。落合君がゐても同時に生駒書記にも礼を云つて置くがよい。……

私の娘だと云つて文学部の書記にでも小使にでも決していばつた風をしてはならぬ。誰にもかれにも謙遜丁寧にせねばならぬ。……

十一月十二日付け西田静子宛書簡でも、次のように語っている。

体はさうわるいと云ふでもない様で安心して居ります、どうか体と心とを大切に油断なく気をつける様に、遠くにいでも私の心はいつもお前の傍につきそつてゐます。昼も夜もお前のことを思はない時はありません。私は何時死んでも思ひのこすことにはないが、唯お前のことのみ気にかかります。……

これから日本もどういふ風になつて行くか中々容易でないとおもひます。

死といふことは何も恐しいことはない。人間は誰もかれも皆死を免れることはできません。長く生きてとてさうよいこともない。死は清き月夜よりも美しい。……

5 戦後の日本を思いながら―昭和二十年

昭和二十年（一九四五年）一月二十日、大本営は「帝国陸海軍作戦大綱」という本土決戦の作戦を決定した。二月十九日、米軍は小笠原諸島の硫黄島に上陸したため、陸軍は、大綱に従い、本土決戦に向けての師団等を新設するための大動員を行った。しかし、米軍による無差別爆撃はますます激しくなつていく。なかでも、三月十日の東京大空襲は最大規模のもので、死者八万人以上に上つた。さらに、沖縄戦での十万人もの島民の犠牲、二度にわたる原爆投下による二十万人以上の犠牲など、国民の多大な犠牲と困窮の末、日本

は八月十五日、終戦を迎えることになる。

急迫する戦況

日本本土への空襲が頻繁に行われるようになった状況下、西田は、日本人が一億総玉碎になることを憂慮している。一月四日付岩波茂雄宛書簡では、悪化した現在の状況に対して、このような状況になる前に行動を起こそうとしなかつた政府・軍を含めて、すべての国民が反省すべきだと述べ、戦争による悲惨な世を嘆いている。

……本当に今年位にて各国民が反省してもらひたいとおもひます。これでは全く獅子や虎や猛獣の世界です。人間の世界ではありません。……

東京などの大都市が頻繁に空襲の被害に遭っているのに対し、西田が住む鎌倉は比較的安全であった。一月十三日付下程勇吉宛書簡では、緊迫する戦況の中で冷静に対処していくべきだと述べ、

……空襲頻々晝夜を分たずといふ風ですが鎌倉は安然です。……

今日の軍人思想には是正すべきものも多しとおもひます。

と書いている。

西田は、アメリカに追い詰められる前に一刻でも早く戦争を終結させられる愛国の士が出るように願っている。二月一日付原田熊雄宛書簡でも、戦況は、戦争が始まる前から西田の思い描いていた通りになってきたと述べている。

……御手紙の事は大体想像されます。誠に大切の時と存じます。何とか此際身命を賭して立つ愛国の士がある様に、外からやられる様では実に情ないとおもひます。不幸にして私共が最初から心配してゐた様になつて行くとおもひます。併し私は何より此際一方の極端にゆかないかと恐れるのですが。

また、二月六日付岩波茂雄宛書簡でも、一刻も早く戦争を終らせるために、真剣に考えていく人物が出なければならぬと考えている。

……我国今日の状態実に憂慮之至りに堪ませぬ。そろそろ真摯之人物が出なければならぬ。……

三月十日、米軍による東京大空襲が行われ、東京は焼け野原になった。三月十四日付三宅剛一宛書簡でも、西田はこの東京大空襲の被害について心を痛めている。

……東京の空襲は実に大変の様です。聞くに従つて愈いよいよ悲惨です。此辺も頭上をいつもB 29が通ります。併ともし投弾は致しませぬ。

三宅剛一は、京大文学部時代の西田の弟子で、当時東北大学助教授として科学概論を担当していた。

また、西田の最初期の弟子の一人で、京都妙心寺で禪修行に打ち込んでいた宗教学者の久松真一に宛てた書簡（四月十二日付）でも、大都市の空襲に心を痛めている西田の様子が読み取れる。鎌倉には空襲はまだないものの、周圀の者は心配して、西田に疎開を勧めている。しかし、西田自身はまだその必要はないと感じていたようである。

京都はまだ無事の様ですが阪神も大分やられた様ですね。東京は実に惨憺たるもの様です。ここも始終B 29が頭上を通りますが爆弾は落とさせぬ。皆々私にも疎開せよとやかましく云ひますがすべて天に任せてみます。

一方、岩波書店の編集者・栗田賢三宛書簡（四月三十日付）では、逮捕された哲学者、三木清の身を心配をしている。

……三木のことは本当に気の毒です。時節柄何とか御大切に。

西田の最初期の弟子の一人で、京大文学部で古代中世哲学史を担当していた山内得立やまうち ともたけに宛てた書簡（五月七日付）でも、戦況を心配するとともに、疎開について逡巡し、出版の自由を嘆いている。さらに、二月には、判事の上田操に嫁いでいた長女の上田弥生が急逝している。

……長女の急逝本当に突然にて私も実に驚きました。長命すればする程いやな事のみ多く先立ちし友をうらやみ居ります。ドイツも御存知の如き状態に陥り日本もだんだんその後を追ふのではないかと存じます。情ない次第です。この辺は毎日敵の飛行機がブンブン云つて通り行きます。先達川崎横浜を爆撃せし時など茅山の後が真赤でした。それに相模湾の艦砲射撃上陸などの噂もあり、にげて行く人も多い様です。切に信州辺へ疎開をすすめる人もあるが、もう女中もにげ帰り老人二人にて他に行つて中々不自由なるべく信州の冬も凌ぎ難きかとも思ひその気にもなれませぬ。万事天に任せて居ります。いろいろ書いたものも生きて居る中に見ておもらひしたいが印刷出版といふことも全く不可能なのです。殆んど校正済のものまで焼かれてしまひました。……

長女弥生の死については、西田は、上田操や孫の上田久、娘の静子や息子の外彦などに手紙を書いている。二月二十五日付西田外彦宛書簡。

弥生の事は何としても思ひ出され無限の淋しさと深き悲哀に沈んで居ります。私も七人の子供をもちましたがもはや四人は私に先立つて逝き、あと三人になりました。幽子の死にはじめて子を失ひし悲哀を味ひ、弥生の死に子に先立たれし老人の悲哀を知りました。どうか残る三人相親み相助け共に美しき情愛の生涯を送つて下さい。私はもう年老いて何もできませぬ。又何時死んでもよい。唯、私でなければならぬとおもふ仕事が多く残り居りこれだけはできるだけ置いて後世にのこしたいとおもひ居ります。……

ところで、五月二十日付田辺元宛書簡では、皇室を動かして終戦にもつていくべきだという田辺から届いた提案に対して、自分の無力を嘆いている。田辺元は、京大文学部で西田の後を継いでいたが、西田哲学批判を行なつたために、西田とは絶交状態になっていた。しかし、国家危急の折、田辺は、西田に動いてもらい、皇室とも深いつながりがあり、西田の弟子でもあった近衛文麿に、終戦のことで皇室に働きかけてもらおうと考えたのである。この田辺の考えは、すでに京都での秘密会合の場では述べられていたことであつたが、田辺はそれを実行に移したのである。この田辺の手紙は、候文で書かれた大層畏まったものであつた。

久しぶりにて御手紙拝見いたしました。御議論、御高見、憂国の御精神、敬服の至りに存じます。及ばずながら私共も今日いろいろの意味に於て、皇室がお出ましになる外ないかと存じ居ります。先に近衛公其他にもそんな事を話したこともありませぬ。併しそれには先見の明があり強固な意志と実行力のある輔佐の偉人がなければならぬと存じます。近衛公など余程聡明の人とは存じますが、まだ何だか少し因はれて居る様に思はれる所もあり、それにあの人はそれだけの力量のある人なのでせうか。宮様も大変御聡明の方であり憂国の情に富ませられる御方と承り居ります。宮中の御関係など我々に分りませぬ。何事も実行といふことには尚一方の勢力といふものが尚中々むつかしいのではないでせうか。原田君なども、お話しのお話へは多少連絡もあるのかと存じますが、先達てより憲兵の取調べを受けて居り、一時近衛君などの方も皆心配いたしました。近衛君なども一派のものから狙はれ居り邪魔せられ自由ならぬ所あるのではないでせうか。現実には否応なしに漸々押し進めて行く様です。此頃大分分つて居る人もあると存じますが、さういふ人に力なく実行々と云つて居る人は実に分らない。中学生位の頭しかありません。人格者があつても政治家はありません。我国の政治家は実に思想貧弱と存じます。

いつか御相談申上げました御教育の人の件も私の意見は採用せられず他の人になりました。すみませぬでした。

御叱りを受けることと存じますが何事にも意気なくお恥しい次第です。老老何の役にも立ちませぬ。何卒若い人々の御奮闘をいのります。

このように、西田は自身の無力を嘆いているが、実際には、近衛も、原田も、昭和十八年十一月頃から、戦争終結のために可能な限り動いていたようである。具体的には、高松宮や木戸幸一を通して、一刻も早い戦争終結の決断を天皇に仰ぐべく努力していたのである。これは、最終的には「近衛上奏文」となるが、しかし、そういう努力が徹底抗戦を叫ぶ陸軍や憲兵隊に睨まれ、近衛も原田も危険な状況にさらされていたのである。実際、大藏の吉田邸で行なわれた「近衛上奏文」の起草に参加した吉田茂らは逮捕された。

疎開をためらう

三月十九日付堀維孝宛書簡からも分かるように、西田の孫達が東京に住んでいるため、

西田はその身を案じている。また、西田本人にも郷里である石川県河北郡宇ノ気町へ疎開を勧める話が出始めていた。

その後どうしてみますか。東京は大変の様ですね。君の辺は無事か知らぬが、ここも無事だが、併し上陸といふことにもならば、此辺は危険、且つ第一食物にも困るだらうから、と云ふので、郷里のものが心配し、昨日も来て切に郷里に帰ることをすすめるが、どうしたものか。

とにかく東京が危険故、孫共をここに集めるつもりだ。

多分君も御存知かと思ふが上田操の妻小生の長女が二月半頃急死してこれにも実に困った。

西田は鎌倉で暮らしているが、その鎌倉もいよいよ空襲に見舞われる危険が迫ってきた。西田のことを心配して郷里の石川や縁の深かった信州からしきりに疎開を勧める手紙が届くが、西田は身体の不調や交通の不便を理由になかなか動こうとしない。息子の外彦も西田に疎開するように説得するが、なおためらっていたようである。三月二十八日付務台理作宛書簡では、妻と二人の疎開先での生活を心配している様子が見て取れる。

……とにかく岩波へ聞き合わせ居ります。まだ返事来ないが。

この辺戦場になる危険ありなど噂あるので一時動かされましたが、又大分慎重に考へて調べて行かないと老人二人きり知らぬ所に行つては色々困るのではないかとも思ひ、又第一私は冬ストロップでもなければ寒い所ではとても立ちゆかぬとも思ひ迷ひ居ります。……

同じく、四月十日付木村素衛宛書簡でも、周囲の者が心配しているため、仕方なく疎開も視野にいれながら考えだしていることが窺える。しかし、西田の本心としては、見知らぬ土地柄の家で生活することになることに気がすまず、そのまま鎌倉を動くつもりはなかったようである。

……東京の方へお出での由、此頃大変で御座いませう。私も疎開するなら郷里の方がよいと存じます。息や親戚のものが心配するので一時動かされましたが中々面倒なり。

戦局の様様にていつまでも分らず半年一年も他人の所で世話になり居るものと存じますのでまあ此儘と思ひ居ります。

五月一日付朝永三十郎宛書簡でも、鎌倉も空襲の危険が迫っているため、周囲の者が疎開をしきりに勧められていることが分かる。

廿一日の御手紙漸く昨日拝受いたしました。手紙も随分かかりました。……

御令息様の御宅も御災難の由誠に御気の毒の至りに存じます。倅の処は荻窪の方なるがまだ無事の様で御座いますが、この頃孫共（末娘の一族）が疎開して来てみますので騒々しくて困ります。B 29・P 51 いづれも百機位も入つて来ますので皆々疎開々々とかましくすすめますが、女中も戻らず老人二人で此頃流行の信州辺の知らぬ所へ疎開しても中々難儀とおもひ運を天に任せて落つき居ります。先日の夜京浜西部をやられた時砲声殷々私の所の東方の例の茅の山の方が真紅になりました。どうもひどい世の中となりました。今後いかがなるか。早く死んだ友人共が幸の様にも思ひ又こんな時代を見るのも面白いとおもひます。独伊もみじめなものになりましたね。やはり全体主義といふものはだめなものかと存じます。……

朝永三十郎は、京大文学部時代の西田の同僚で哲学史家、当時はすでに退官、京都に住んでいた。この手紙に出てくる戦災に遭った御令息とは、理論物理学者の朝永振一郎のことである。

五月十一日付下村寅太郎宛書簡でも、西田の疎開に対する考えが述べられている。周囲の必死の説得も受け止め、疎開を考え出してはいるが、移動も大変であることを視野に入れ、なおためらっている。下村寅太郎は、京大文学部時代の西田の弟子で、ライブニッツ研究や科学哲学で大きな業績を残し、当時は東京文理大の教授をしていた。

八日に御投函の御手紙本日拝受いたしました。図書の疎開は大変で御座いましたでせう。小生の疎開のことにつき色々御配慮下され難有御座いました。大変よささうな所に満足に存じます。家もいづれにてもそれ位の所は結構と存じます。お考に御任いたします。食物もそれにて結構と存じます。唯私の恐れるのは冬の寒さで御座います。年とるに従ひ寒さには実には堪へ難くこれのみ心配で御座います。

今ありのままに私共の気持ちを申し上げますと次の通りで御座います。今ここから荷物を送り出すといふことが殆んど不可能であり切符を買ふことも大変なり飛行機は始終頭上を通りますが此辺は投弾もいたさず特に鎌倉でも私の谷の如き処は安全地帯かと存じます。無論直撃を受ければそれまでだがそれはどうも運命とあきらめる外ないと存じます。後の山に大きな壕を掘りました。少し前に女中も帰つてしまひまして今は老人二人きりになりました。二人きりにて未知の処に何から何までも人の御世話になるのも心苦しくも存じます。それに暫く二三日といふ様ならまだしもですが半年になるか一年になるか分らず何も持つて行かれない（今は三箇位の外許されずこれも中々むつかし）とすれば可なり長く不自由の生活をせねばならぬかと存じます。そんなこと色々考へまして兩人共に尻込みいたします。できるならこちらにてと思ひ居る次第で御座います。

併し戦況次第にて此辺もどうなることか分らず形勢によつてはそんなことを云つて居られなくなるかも知れないと存じます。万一の場合といふことを考へて置かねばならぬと存じます。それで先日外彦が参り万一の場合としてとかく逃げる準備に御地に家をお借りして置いた方がよろしからうと云ふのでさう云ふ様に考へて居ります。万事外彦に任せました。何卒万事外彦と御相談お定め願ひたいと存じ居ります。家はそのどれでも結構かと存じます。

万一の場合には固より荷物などは持つて行くといふ訳には行かぬと存じ殊に冬になつては尚々困ると存じますが万一の場合にはその辺にて何とか少し日常品（例えば着物夜具など）を借りる様なことができますものか。いかが。

しかし、五月三十日付下村寅太郎宛書簡や、五月三十一日付布川角左衛門（岩波書店編集者）宛書簡では、疎開先の長野県上伊那郡飯島村への鉄道の道順を尋ねているところをみれば、この段階では、西田はようやく疎開することに傾いたようである。

論文の印刷を急ぐ

また、西田は戦禍でいつ原稿がなくなってしまうかをことのほか恐れ、四月十四日に一先ず書き上げた「宗教論」（場所的論理と宗教的世界観）を一刻も早く印刷するよう望んでいる。五月十六日付島谷俊三宛書簡では、次のように述べている。

……印刷のこと、岩波は出すことは出しますが、印刷所を新潟に移してといふこと故

尚大部時日を要すること存じます。いつになりますかは不明。此頃の事故、安全地帯と云つても何時も何処でも出版などできないと云ふことにもならぬとはかぎりませぬ。さう考へるとにかく何でも安全の所にて一日も早くやつて置くのがよいのではないかと考へます。高山の方でいつ出せるのかと聞いてやつて居ります。その返次第にてとにかく尊兄の方にて一日でも早くやつておもらひするのが、一番良策ではないかと考へて居ります。原稿はもうすつかりできて居ります。それで尊兄の方にて

一、印刷屋に於て大体どれ位の時日にてできるか。十行二十字詰ノ原稿用紙二百七十頁位ノモノ

二、右印刷費用凡そどれ程

三、今鎌倉から原稿を送ることができないから（鎌倉から小包禁止）先日のお話の様に尊兄の方の生徒にてこちらに寄つてくれる人ありや
右一寸お知らせお願い申上げます。

同じく、五月二十五日付島谷俊三宛書簡でも、次のように述べている。

昨日は御電報難有御座いました。早くも〇〇さんができました由安心いたしました。岩波でも一つ cover を作つてくれました。（とにかく写しが二三もできて居れば）これで安心と存じます。一昨夜の空襲は静岡へも行きし由実は少し心配いたしました居りましたが無事なりし由安心いたしました。

その後高山君より何の返事もまぬらず。できることはできるのなんと存じますがまだいつともはつきり時日が分らぬのかとも存じます。

早くそちらでやつてもらつた方がよいかと存じ居ります。印刷は全く一時的のものですからどんなにまづくてもよろしい。字がよめるだけのものでもよろしう御座います。唯校正さいよくできますれば。

紙は上田方にあるだけで、せいぜい百部もできれば十分です。五十部位でもよろしい。必ず別に御配慮ない様に願います。

印刷費の方がどれ程になりますか。とにかく私の方にて一時何とかして置かねばならぬと存じます。大凡の所をお知らせ下さい。此頃の様では他に送り出すことができますかしら。希望者に配達できますかしら。

（鎌倉の方では今小包も第四種郵便も受け付けてくれませぬ。静岡の方はさうでもない様

だがさうなるかも知らぬ。……………

すぐO.K.ができませんして本当に喜ばしく存じます。大いに急いでおやり下さったことと存じ恐縮に存じます。どうか原稿はなるべく安全に。

日記によれば、西田は、『宗教論』を、昭和二十年二月四日に書き始め四月十四日に書き上げたが、これを、国家の再生と将来への希望をもって決死の思いで書いていたことが分かる。三月二十三日付島谷俊三宛書簡でも、

……私は実に決死の覚悟を以てペンを取つてみます。……

と言っている。

また、一月二十七日付布川角左衛門宛書簡では、ファイヒテの『ドイツ国民に告ぐ』を求められていることが分かる。

……………

昔、大津康の訳したファイヒテの『ドイツ国民に告ぐ』が岩波文庫に出たと思ひますが、あれはもう一冊も残つてみせぬでせうか。

また、五月十一日付鈴木大拙宛書簡では、ユダヤ民族の歴史を読みながら、国家の再生に思いを馳せている。この日、西田は鈴木宛に三通、他に下村寅太郎宛など五通、計八通手紙を書いている。

…… 此頃猶太民族の宗教発展の歴史をよんで色々考へさせられる。猶太人がベビロンの捕囚の時代に世界宗教的發展の方の基礎を作つた。真の精神的民族は斯くなければならぬ。……

…… ヒットラーも悲惨な末後を遂げた。無理が通れば道理が引込むといふ諺もあるが無理はやはり遂には通らぬものらしい。今の人は力信仰の全体主義が新しい行方のやうにいふが。逆にそれは旧思想で最早時代錯誤であり、新しい方向は却つてその逆の方向に即ち世界主義的方向にあつて、世界は不知不識その方向に歩いて居るのではなからうか。

西田が必死に書いていた宗教論の背景には、国家の将来を思う愛国の思いが込められていたのである。昭和二十年三月二十六日の日記にも、

旧約のエレミヤをよむ、所感多し。

という記事が見られる。他にも、ヴォルツの『預言者エレミア』を求め読んでいることが日記にも記されている。この本は、京都の旧宅から高坂正顕が、昭和二十年四月十六日東京出張の折、鎌倉の西田に直接届けたものである。西田は、この本を翌日早速読んでいる。

西田は、連合国による占領が予想される敗戦後のわが国の苦境を、古代イスラエル人が味わったバビロンの捕囚の苦難になぞらえらるとともに、自分自身を、古代イスラエルの危機の時代の預言者エレミアに仮託したのではないか。

昭和二十年三月は、東京大空襲があり、沖縄戦が始まった月であった。西田の日記にも、四日、B 29多数来襲。五日、夜B十機。八日、B二三機来。十日、東京又昨夜大に焼けた由。十二日、一昨夜のB 29百三十機の空襲、東京大火災、聞けば聞く程悲惨。十三日、一昨夜名古屋来襲。十四日、昨夜九十機大阪来襲。十七日、今朝二時神戸へ六十機来襲、火災。十八日、九州へ艦載機多数来襲。十九日、名古屋へB 29百数十機、艦載機四国、阪神へ、B百数十機名古屋へ。二十八日、敵沖縄の一部に上陸とある。祖国は滅びつつあったのである。

弟子達への遺言

昭和二十年の西田の書簡には、共通したことを書いた弟子達に宛てた手紙がある。それは、現在の戦況に対する西田の見解と敗戦後の日本の精神的復興についての西田の考えを述べたものである。すでに西田自身は老齢であったために、敗戦後のことを弟子達に託そうとしていたことが窺える。それは、老い先短い自分の命を感じた西田の弟子達に向けた遺書だったのではないか。一月八日付西谷啓治宛書簡では、次のように書いている。

私はいろいろな子や孫の心配に苦められ妨げられながらも心を奮い起して何としても自分の考を世に知らせ多少とも我国の思想界に貢献しようとして日夜努力して居る。而もだんだん老年になり行く。旧友も年を逐うて凋落して行く。私も何時とも分らない。久し

く親灸した若い人々に少しでも自分の考えを理解してもらって置きたいと思ふ。私の考には実は誤解が多い。(故意か、軽蔑か) 実に残念に思つてゐる。自分では自分の考が益々明になつていろいろのものが包括せられて行くとおもふが。

三月十一日付高山岩男宛書簡は、ほとんど西田の遺言である。

.....

私は此際実に心配いたし居ります。此には実に大決心をせねばならぬ時ではないかと存じます。このままに引きづられて行つて足腰も立たないようになつては民族生命もだめになつてしまはないかと存じます。何としても我々民族がどうあつても此際精神的自信を失ふ様なことがあつてはならないと存じます。力でやられても何処までも道義的に文化的に我団体の歴史的世界性、世界的世界形成性の立場だけの自信を失はず、固く此立場を把握して将来の民族発展の自信を持たす様にせねばならぬと思ひます。

先日例の K 君がこちらに來訪せられました故此事を論じ同君も全く同じ意見でしたが、同君もどうも何ともできない様なので。

私はどうも此外に将来の途はない様に思ひますが。

そこで私は君方に一言したいのですが。君方は一つ此の出立点となる深大なる思想學問の根柢を作らねばならぬと云ふことです。私は K 君の間に対して断じて日本人に可能だと云つて置きました。唯力にのみ依頼して居ればきつとだめになります。此事は高坂、

木村、西谷、鈴木等諸君に御伝へ置き下さい。

私はもはや老骨何時とも知らぬ身の上ですが、唯これを念として努力して居ります。今、宗教論を書いて居ります。……できるだけ書き残します。

西田は敗戦後の日本人が精神的自信を失うことを心配し、学問復興によつて日本人の精神的立ち直りを期待していたようである。同じようなことは、三月十四日付長与善郎宛書簡にも見える。

我国の現状については一々尊兄の御手紙と御同感。実に実に憤慨の至りに堪へませぬ。不幸にして私共の予見してゐた通りになりました。田舎者共の世界みずの驕慢無謀の自業自得の外ありません。而も今日に至りて尚総理以下空虚な信念を号呼して居るに過ぎ

ないではありませんか。こんな風にして国民が引づり引づられてどん底に陥入れられて国民が全く自信を失つてしまふ様ではもはや再起の途もなくはせないと恐れるのです。私は国体を武力と結びつけ民族の自信を武力に置くといふのが根本的誤ではないかと思ふのです。古来武力のみにて栄えた国はありません。武力はすぐ行きつまずき永遠に栄える国は立派な道徳と文化とが根柢とならねばなりません。我国民今や実に此の根柢から大転換をやらねばならぬ時ではないでせうか。外交も何もかも無視した武力一片に国民を指導してきて武力がだめになった時国民は何処に自信の根柢を育ち得るのであらうか。自信を失つた国民こそ実に亡国の民です。縦し国家が一寸武力的に衰へても高い大きな立場に於て国民が自尊心を有つならば必ず又大に再起するでせう。私は日本国民は相当優秀な国民と信じます。唯指導者がだめであつた。残念の至りです。そして学者も文学者も深く考ふ所なく唯これに便乗追従するにすぎませぬでした。私は今日程国家の思想貧弱を嘆じたことはありません。

私ももう老年。もう何年生きか分りませぬ。特に今日の如き生活状態にては何とか若い人々の奮起をいのります。東京の事、実に悲惨酸鼻の至りに不堪。

四月八日付高坂正顕宛書簡でも、道義の復興を訴えている。

三十一日の御手紙漸く昨日拝受いたしました。図書の疎開にて御多忙なりし由。いづれ京都の方へも行くでせう。人文科学研究所では原理的のものをも自由に御研究の御考の由。誠に喜ばしく存じます。どうしても原理的のものを深く研究せないと現実の諸問題も唯その皮相を見るのみにて深くその真実を掴むことはできないと存じます。我国の政策の観念的独善的にて現今の如き難局に陥つたのも一に我国民及政治家に深い思想がなかつたからと存じます。学業奉還など実に馬鹿げたことを云つたものです。今こそ真に深く学問に心を潜むべき時ではないでせうか。無論今は学生にもその余裕は御座いますまい。併しかかる時こそ大に新なる学問の発展を念とすべき時と存じます。……道義文化に基礎を置かずして永遠の国家発展はあり得ないと思ふのです。一時の時勢のために迷はされてかかる根本的思想を誤つてはならないと思ひます。……高い立場を何処までも失ふことさえないければ一時は万一国家不運の時あるも必再起大いに発展の時が来るとおもひます。道義文化の立場に於て真に東洋に大なる使命を有つて居るのではないでせうか。本当の日本はこれかと存じます。

しかし、もう西田の命も尽きようとしていた。六月一日付日記には、

ウス曇 20

とだけ記載されていて、ぶつりと切れている。西田が、終戦を待たずして尿毒症で息を引き取ったのは、昭和二十年六月七日午前四時のことであつた。
今から七十年前のことである。

(二〇一五・六・一)